

ケルト社会における貨幣の機能

——「埋蔵貨」の事例から——

九 鬼 由 紀

は じ め に

「・・・リュディア人はわれわれの知る限りでは、金銀の貨幣を鑄造して使用した最初の民族であり、また小売り制度を創めたのも彼らであった。」

(『歴史』, 巻 1, 94)⁽¹⁾

ヘロドトスのこの記述は、古代ヨーロッパ世界における貨幣製造のはじまりを示す。紀元前 7 世紀から紀元前 6 世紀のことである。リュディアの貨幣製造の技術はギリシア世界へ伝わり、そしてさらに、ギリシア世界を通じてアルプス山脈以北の世界－ケルト世界－へと伝わった。

ヨーロッパ鉄器時代の担い手であるケルト人は、紀元前 8 世紀から紀元前 1 世紀にかけてヨーロッパ地域の広い範囲に居住し、独自の社会を築いた。彼らの貨幣製造のはじまりは紀元前 3 世紀まで遡り、マケドニア王フィリッポス 2 世によるスタテル金貨を真似たものが最初である⁽²⁾。その後紀元前 2 世紀より、ケルト世界独自の様式の貨幣が製造された。ヨーロッパ東部からブリテン島にいたる広い範囲で出土する多種多様なケルトの貨幣は、ケルト人が「貨幣製造」という外来の文化を好意的に受容し、発展させたことを示すものである。ケルト人自らが拵えた貨幣は、ケルトの部族どうしや地中海世界の民との交易に使用され、とくに紀元前 1 世紀以降、彼らの社会に貨幣経済が浸透した。

しかし、ケルト人の貨幣の使用法はそれだけに留まらなかった。現在のフランスやドイツ、スイスの地中や水中で、夥しい数のケルトの貨幣がまとまって出土する事例が数多く見られるのである。「埋蔵貨 (Coin Hoards)⁽³⁾」と呼ばれるそれらの出土物は、その出土の状況や含まれる貨幣の種類から、非常に特別な意味を持って作為的に埋められたことを容易に想起させる。ケルトの人々はどのような意味でこれらの貨幣を埋納し、秘匿したのだろうか。

本稿はこの「埋蔵貨」を足掛かりとして、それらの埋納された意味と、ケルト世界における貨幣の機能について考えるものである。発掘報告資料などを基に、「埋蔵貨」の存在するコンテキストと、納められた貨幣の分析を行ない、推測し得るそれらの意味と役割を考察する。

1. ケルト世界の貨幣製造

ケルト世界の貨幣はマケドニアのその模倣からはじまった。紀元前4世紀のマケドニアやバルカン半島で流通していたスタテル金貨やドラクマ銀貨などのうち、表面にアポロンの頭部を、裏面に2頭立て戦車をあしらったフィリップス2世のスタテル金貨が直接のモデルとなった。このスタテル金貨はこの時代、傭兵としてギリシアに仕え、紀元前4世紀終期にケルト人の土地へ帰還してきた人々によってもたらされたもので、スイスやラインラント、ガリア中部やドナウ流域へと伝来し模倣された⁽⁴⁾。また中央ヨーロッパのケルト貨幣の研究者ハンス・ヨルク・ケルナー (Hans-Jörg Kellner) はケルトの貨幣のもうひとつの起源として、ギリシア植民市マッサリアのドラクマ銀貨を挙げる⁽⁵⁾。マッサリアのドラクマ貨幣は、紀元前5世紀ころより同市と交流のあったリグリア (現在のフランス南部) を経由してイタリア北部のケルト人に伝わったものである。彼らはマケドニアやマッサリアを通してギリシアの貨幣に触れ、その製法や図像を会得した。

紀元前225年の「テラモンの戦い」でのローマへの敗北以降、ケルト人はゲルマン人をはじめとした多くの異民族の侵入を受けた。その動乱のなか、と

くに紀元前2世紀ころより、周りを石壁で囲んだ「オッピドゥム (Oppidum)」と呼ばれる居住様式が生まれ、結果ケルト社会は「開かれた部族の中心地」、そして「都市」として発展を遂げることとなった⁽⁶⁾。物資と人間が集まることによって経済活動が活発化し、それにともない貨幣も多く作られるようになった。オッピドゥム内やその近郊では貨幣の鋳型や印が数多く出土しており (図1)、その摩耗の度合いから貨幣製造が活発に行なわれていたことが分かる⁽⁷⁾。この時代にはすでにギリシアの貨幣の模倣を脱し、抽象化された動物や幾何学模様など、いわゆる「ケルト的」な図像が刻印されるようになっていた。

貨幣経済の確立されていたことの分かる事例として、ドイツ南部バイエルン州の街マンヒング (Manching bei Ingolstadt, Ldkr. Pfaffenhoffen) にあるオッピドゥム遺構がある。古代インゴルシュタット地域における東西、および南北交易の拠点であったこの地では、ドイツ南部で多く出土する「レインボーカップ型 (Regenbogenschüsselchen)⁽⁸⁾」と呼ばれる貨幣の製造の中心地であった (図2)⁽⁹⁾。レインボーカップ型の貨幣はこの地だけでなく、現在のチェコやオーストリア、かつて「ガリア」と呼ばれたフランスからも出土しており、マンヒングのオッピドゥム発掘者のひとりルパート・ゲプハルト (Rupert Gebhard) は、これらの貨幣の流布は紀元前2世紀以降のマンヒングにおいて、完全な貨幣使用のシステムが構築されていたことを示すと指摘する⁽¹⁰⁾。

ギリシアの模倣としてはじまったケルトの貨幣は、時代を下るにつれケルト独自の様式を持つようになり、紀元前の最後の100年間にはケルトの部族社会のシステムにしっかりと組み込まれていたことが分かる。そのように、貨幣の商業的な利用が定着していたなかで、「埋蔵貨」は数多く遺されたのである。

2. 「埋蔵貨」

ここではとくにフランスとドイツ南部の「埋蔵貨」の事例に光を当てる。

「埋蔵貨」の出土場所は、貨幣が最も頻繁に使用されたオッピドゥムの内側ではなく、近郊の平地や丘陵の上、部族の中心から離れた村落、自然の真ん中にあることが多い。コリン・ヘイゼルグローブ（Colin Haselgrove）の統計では、フランス北部の出土事例のうちの24.7%が、部族の中心から離れた辺境の居住地にあるとされる⁽¹¹⁾。

オッピドゥム近郊の平地で出土する事例として、ここではマンヒングの近郊にある小村イルシング（Irsching, Gde. Vohburg a.d. Donau, Ldkr. Pfaffenhofen）の例を取り上げる。1858年、イルシングの排水工場の現場の深さ50～60cmの地層から、900枚以上のケルトの貨幣と、それを納めていたと思われる黒い陶器の破片が見つかった。埋納されていたのはすべてマンヒングで製造された「レインボーカップ型」のスタテル金貨であり、その図像によって約15種類に分けられる（表1）。このイルシングの「埋蔵貨」は、1751年にガッガース（Gaggers, Gde. Odelzhausen, Ldkr. Dachau）で発見された「埋蔵貨」と並ぶ最大級の「レインボーカップ型」のスタテル金貨の一括出土物である。

バイエルンは「埋蔵貨」の出土が多く（図3）、イルシングのほかにも以下の4カ所での出土例がある（図4）⁽¹²⁾。北部の小村グロースビッセンドルフ（Grossbissendorf, Hohenfels, Landkreis Neumarkt in der Oberpfalz）では、1986年に農地から386枚の「レインボーカップ型」の貨幣とボヘミアの金貨1枚が出土し、ニーダーバイエルンのヴァラーズドルフ（Wallersdorf Lkr. Dingolfing-Landau）では1987年、なめらかな表面のスタテル金貨が368枚、剣を持つ戦士の刻印されたボヘミアの貨幣が見つかった。1990年にはミュンヘン南西部のアマー湖（Ammersee）とゾントハイム（Sontheim, Lkr. Unterallgäu）で、それぞれ多量の「埋蔵貨」が発見されている。それらは皆、紀元前2世紀終期から紀元前1世紀に年代づけられる⁽¹³⁾。

フランスにおいて「埋蔵貨」が見つかる場所は上述した辺境の居住地のほか、「水中（または水辺）」と「聖域」が主である。先のヘイゼルグローブの統計では、水中の事例は12%、聖域の事例は13%である⁽¹⁴⁾。

表1 イルシングの出土貨幣の種類

タイプ	表面	裏面	出土数 (枚)
タイプIA	嘴を持つ蛇と雄羊の角を持つ人頭のモチーフ	トルク（首輪）と6つの丸のモチーフ	181
タイプIB	タイプIAと同じ	リラ（堅琴）の形の装飾と規則正しい丸のモチーフ	11
タイプIIA	冠と左向きの鳥の頭のモチーフ	トルクと3つの丸のモチーフ	249
タイプIIC	葉冠の縁取りに、2つの円に挟まれる蛇のモチーフ	トルクと5つないし6つの丸のモチーフ	196
タイプIID	2つの丸に挟まれる蛇と、両端に円をついた葉冠のモチーフ	トルクと5つの丸、線刻のモチーフ	2
タイプIIE	鳥の頭を持つ蛇と、端に円をついた葉冠のモチーフ	十字、3つの丸、リラの装飾とS字型の線刻のモチーフ	3
タイプIIF	鳥の頭と冠のモチーフ	トルクと6つの丸、花のつぼみのモチーフ	2
タイプIIIA	鳥の頭と両端に丸をついた冠のモチーフ	トルクと6つの丸のモチーフ	12
タイプIIIB	鳥の頭とタイプIIIAのような冠、線刻のモチーフ	タイプIIIAと同じ	1
タイプ不明	鳥の頭のモチーフ	トルクと4つの丸のモチーフ	4
タイプIV	ふさふさとした葉冠のモチーフ	トルクと丸のモチーフ	230
タイプV	図像なし（いわゆる「なめらかなレインボーカップ型 [glatten Regenbogenschüsselchen]」）		9
タイプXI	装飾突起と点描のモチーフ	プロペラ型の3枚の葉と点描のモチーフ	3
タイプVIIA	植物の「がく」の形の渦巻き装飾と丸のモチーフ	線対称の曲線装飾とトゲのモチーフ	4
タイプVII	右向きの巻き髪の人頭のモチーフ	向き合うリラの装飾とS字の曲線、麦粒のような装飾のモチーフ	6

(Hans-Jörg Kellner, *Die Münzfunde von Manching und die keltischen Fundmünzen aus Südbayern*, Steiner Franz Verlag, 1998, S.159-169. を基に筆者作成)。

水中に多量の貨幣を沈める慣習は紀元前1世紀ころ、とくに現在のフランス北東部にあたるガリア・ベルギカで頻発した。沈められる場所は川が最も多く、次いで泉、沼などの流れのない水辺に多い⁽¹⁵⁾。出土する貨幣の大半は青銅や銀と銅の合金の、価値があまり高くないものであるが、2分の1スタテルなどの金貨もわずかながら納められる。

聖域における貨幣の埋納は、ベルギー国境付近のピカルディ（Picardy）やノルマンディー地方などで、水中への貨幣の埋納と同じく紀元前1世紀ころより行なわれるようになった。それ以前の聖域における主たる埋納物は武具と人骨であり、その痕跡はグルネイ・シュル・アロンド（Gournay-sur-Aronde, Oise）や、リブモン・シュル・アンクル（Ribemont-sur-Ancre, Picardy）の聖域跡において見られる⁽¹⁶⁾。貨幣の埋納は紀元後1世紀まで続けられ、それゆえにガロ・ローマ時代の、四辺形の囲いの内側に社を持つ聖域での出土もある。帝政期以降はローマの貨幣が埋納物に含まれることもあった⁽¹⁷⁾。

このほか「埋蔵貨」は、紀元前1世紀ころにガリアの影響を受け貨幣製造

のはじまったブリテンの聖域跡でも見ることができる⁽¹⁸⁾。ケルト貨幣の「埋蔵貨」は、紀元前2世紀から、ところによっては初期ローマ時代にいたるまで、辺境の地中や川の流域、あるいは聖域など、特定の環境に偏って埋納された。これらの「埋蔵貨」にはどのような意味があったのだろうか。

3. 「埋蔵貨」の意味

「埋蔵貨」の役割について、バイエルンのケルト貨幣の研究者ベルンヴァルト・ツィーガウス（Bernward Zieglus）は2つの解釈のしかたを提供している⁽¹⁹⁾。すなわち、①他民族の移動に関連したものとする解釈と、②神への奉納物とする解釈である。

①は出土貨幣の推定される製造年代を根拠とする。バイエルンの「埋蔵貨」の貨幣は、先述のように紀元前2世紀終期から紀元前1世紀に年代づけられる。他方、ガリアのそれは紀元前140年以降と考えられている⁽²⁰⁾。これらの時代は、各地のケルトの部族が異民族の侵入に悩まされていたころであった。ドイツ南部では、紀元前2世紀後半のキンブリー族やテウトネース族といったゲルマン人部族の南進がそれにあたる。彼らがドイツ南部地域（当時は「ウインデリキア」と呼ばれた）を經由してやってきたために、ケルト人が貨幣を地中に隠した、とするのが前者の解釈である⁽²¹⁾。ガリアの場合は、河川や聖域での「埋蔵貨」の年代が、カエサルのガリア遠征のはじまった紀元前1世紀に増加していることも、この解釈を裏づけるものとなるかもしれない。しかしこの解釈は、貨幣とともに出土するその他の年代を特定できる遺物（陶片、装飾品など）がほとんど残存しないために、実証ができない⁽²²⁾。貨幣の製造年代が、すなわち埋納の年代であるとは、一概に言うことはできないのである。

後者は古典史料の記述に基づいた解釈である。ストラボンは『地理書』において、ガリア・ナルボネンシス（現在のフランス南部）に居住したテクトサゲース族の風習について、次のように記している。

「この地方〔テクトサゲース族の領域〕は金を多量に産する土地である上に、住民も神を恐れ暮らしはけっしてぜいたくではなかったから、ケルト地方の数多くの地に宝庫があった。とりわけ、湖水は盗みを犯してはならない場所を住民に提供してくれていたから、人びとは金銀の重い塊を湖底へ投げ込んだ。・・・かつて市には尊い神域もあって周辺の住民がひじょうに大事に祀っていたし、そのため財貨が溢れるほどになっていた。なにしろ奉納物が多いのにそれらに手をかけようという気を起すものは誰ひとりいなかった。」

（『地理書』4巻1章7節）⁽²³⁾

この記述からは、ケルト人が神への奉納物として大量の価値の高いものを安置していたことがうかがえる。またカエサル『ガリア戦記』にも、戦争の勝利の後に戦利品を一か所にまとめて安置し、それに手を出した者には厳罰を下すというガリア人の風習が記録されている（6巻17）⁽²⁴⁾。価値あるものには手をつけず奉納物として置いておくことは、ケルト世界で一般的な風習であったと考えられよう。「埋蔵貨」の貨幣に含まれる金貨は、そのあまりの価値の高さゆえにほとんど流通しなかったという⁽²⁵⁾。それらは半ば「宝物」とみなされ、聖域などに埋納されたと捉えることもできる。

この「埋納」という行為に神聖性を見出すケルト宗教の観念⁽²⁶⁾も、「埋蔵貨」を宗教的なものとみなし得る論拠である。ケルト人が奉納物を埋める、あるいは沈めることによって神への信仰を表現する慣習は、ケルト社会が「都市」と化す以前、素朴な農業経済社会を営んだ時代から存在した。ケルト社会では自然を具現化した神々が崇められ、ユルゲン・ツァイドラー（Jürgen Zeidler）によると、それらの神々はとくに丘や水に住んでいると考えられた⁽²⁷⁾。自然への崇拜は、農民の私的な、すなわち家族単位で行なわれるような小規模な信仰の延長であり、農民たちは自分たちの生産した農作物や家畜を地中に掘った穴に放り込んで、土地の肥沃や豊穡を祈っていたのである。なお、紀元前8世紀から紀元前6世紀ころには、それらの行為のひとつとして

「埋葬」も含まれていた⁽²⁸⁾。

「埋蔵貨」は、神の存在する場とされた川や泉などの水辺や、オッピドゥムから外れた居住地に存在するケースを多く持つ。聖域以外の箇所での事例では、貨幣を埋め（あるいは沈め）るという行為そのものに、埋納者たちは何か宗教的な意図を込めていたと考えることができる。

しかし、こちらの解釈についても問題があり、それはこれら史料の性質に依る。ケルト人の社会や宗教については、文字としては少なくとも紀元前1世紀以降のギリシア人やローマ人、すなわちケルトの「外の」人間の著述によってしか知ることはできない。それらの著述には、異郷の者、あるいは敵である者やその者たちの慣習を「野蛮に」見せるような誇張があり得ることを念頭に置かねばならない⁽²⁹⁾。彼らの社会や慣習、宗教について、その本来の姿が描出されているとは限らないのであり、誤った解釈がなされている可能性も否定できない。

このように、「埋蔵貨」に関する2つの解釈は、双方とも「埋蔵貨」の存在意義としての決定打には欠けるのである。

4. 貨幣の機能と「埋蔵貨」の意義 図像からの考察

上で述べたように、ケルトの「埋蔵貨」の役割について現段階でははっきりとした結論を述べることはできない。「埋蔵貨」の存在する理由に迫るためには、今一度、先行研究とは異なるアプローチからそれらと向き合う必要があるだろう。

ここではそのアプローチのひとつとして、「埋蔵貨」に埋納された貨幣そのものの、とくにそれに刻まれた図像に注目する。ギリシアやローマの貨幣にも多様なデザインがあり、それらは発行者の権威を示すものや政治的なスローガンを喧伝するように描かれた⁽³⁰⁾。また、デザインの変遷は権力の移り変わりすらも後代の我々に示す。貨幣の図像は、製造当時のその社会が強調したかったもの、いわば世相を反映し、当時の貨幣に担わされた役割を推測する手掛か

りとなり得る。ケルトの貨幣にも、同じようなことが言えるのではないだろうか。埋納された貨幣の図像の分析を行なうことで、貨幣に込められた意味を読み解くことができ、さらにはそれらを大量に詰め込んだ「埋蔵貨」の意義を類推することができるのではないだろうか。ここでは、2にも取り上げたイルシングの出土貨幣を取り上げ、その図像の分析を行ないたい。

表1に挙げたように、イルシングの「埋蔵貨」の貨幣の図像はおおむね15種類に分けることができる。しかし、15種類全てが異なった図像を刻んでいたのでなく、一定の傾向を見て取ることができる。イルシングの出土貨幣において頻繁に見られるモチーフは、表面は「鳥の頭」と「蛇」、裏面では「トルク（首輪）」である。この「鳥の頭」のモチーフ（図5）については、先行研究において興味深い指摘がなされている。

図5はタイプII Cのうちの一枚である。表面には、外周の3分の2程度を囲むように葉冠が施され、中央には大きく曲がった嘴を持つ鳥が、上下を小さな円の装飾に挟まれるかたちで配置される。バイエルンとオーストリアのケルトの研究者ルドルフ・ライザー（Rudolf Reiser）は、この鳥は「ワシ」であり、このモチーフを配した貨幣が、マンヒングのオピドゥムと結びつく根拠であるとする。彼によれば、マンヒングの古代の名前とされる“Artobriga（アルトブリガ）”は、ケルト系の言語の意味において「ワシの丈夫な橋」となるという（ar=erer：ブルトン語で「ワシ」、to=teo：ブルトン語で「丈夫な」、briga=brig：スコットランド語で「橋」）⁽³¹⁾。マンヒング（アルトブリガ）はその名に「ワシ」を冠するため、そこで製造される貨幣にもワシの図像が施されたということである。ライザーのこの主張は、貨幣の図像には製造地の社会的背景や、流布していた観念が反映されていたと考えるための一助となる。そして、この「ワシ」がマンヒングの信仰との関わりを持つ可能性も、ライザーは示唆する。すなわち、ワシはケルト世界の大神の1柱、テウタテス（Teutates）の象徴とされるからである⁽³²⁾。テウタテスはケルト世界の戦争や部族の神であり、残りの2柱の大神「タラニス（Taranis）」と「エスス（Esus）」とともに、ケルト世界全体で最も崇められた神性である⁽³³⁾。

イルシングの貨幣以外にも、バイエルン出土の「埋蔵貨」の貨幣にはいずれも独特の図像が刻印されている（図4参照）。たとえば、グロースビッセンドルフでは星（図4の1）、トルクと円形浮彫のある葉（同2）、ユリの花（同3）、整った髪の人頭（同4）のモチーフが、アマー湖では裏面が星と3つの円、そしてリラ、表面に鳥の頭を描いた貨幣のほか、巻き髪の人頭（同13）、プロベラのようなかたち（同14）、花（同15）のモチーフが、それぞれ刻印されている⁽³⁴⁾。これらのモチーフはすべて抽象的であり、ケルトの貨幣の起源となったマケドニア、あるいはマッサリアなどの貨幣における、神ないし為政者の写実的な横顔と、それらの象徴を施した図像とは対照的である。

この違いについて、筆者は次のように考えている。ケルト美術の伝統において、人の姿をした神像が制作されることは、ローマ支配下に入るまでほとんどなかった⁽³⁵⁾。ローマ支配以前のケルト美術において表わされる神像は、はっきりと人間の姿をせず、動物と植物と人間が融合したような、不可思議な図像であった。鶴岡真弓はこれを「反人像主義^{アンソロポモルフィズム}」と称し、「対象／モチーフの個体性を刻々に瓦解させ、めくるめく変貌の『過程』をそこに見させる美術」とか、「モノの『縁／際／境』に蠢く縁の造形^{アリンジ}」などと説明する⁽³⁶⁾。神の姿を人間として表現するギリシアと、表現しないケルト。この違いは、ギリシアとケルトのあいだの「神の見方」の違いをはっきりと表している。貨幣における抽象的な図像は、このようなケルト人の「神に対する見方」を反映していると考えられる。

このように、貨幣のモチーフにはある種の宗教的含蓄を認めることもでき、それらは製造地である共同体における宗教観を反映していると考えられることができる。しかし、資料の乏しさもあり、现阶段で貨幣に宗教的な意味を見出せる事例はこの「鳥の頭」のモチーフのみである。イルシング出土のほかのモチーフの貨幣にも同じようなことが言えるかは不明であり、これらのみによって「埋蔵貨」の性格を決定づけることは難しいと言わざるを得ない。

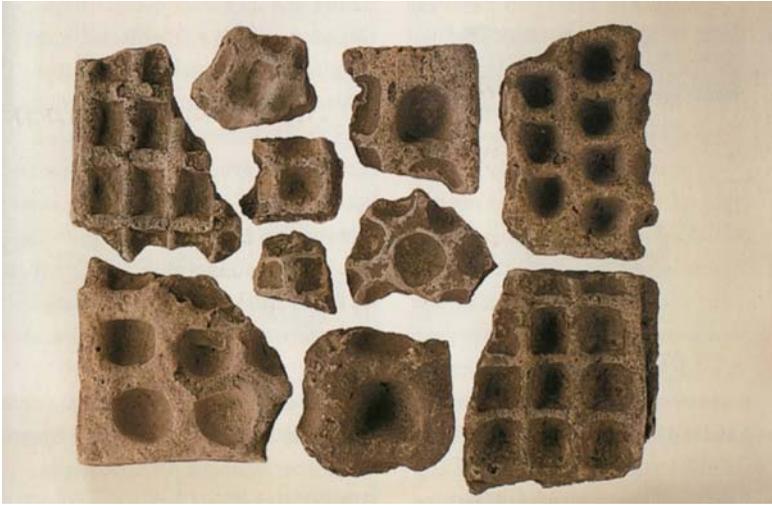


図1 貨幣の鋳型

(Susanne Sievers, *Manching: Die Keltenstadt*, Theiss, Stuttgart, 2003, S.81, Abb.86.)



図2 マンヒング出土の金貨, 銀貨, 銀銅合金貨幣
(*Ibid.*, S.80, Abb. 85.)

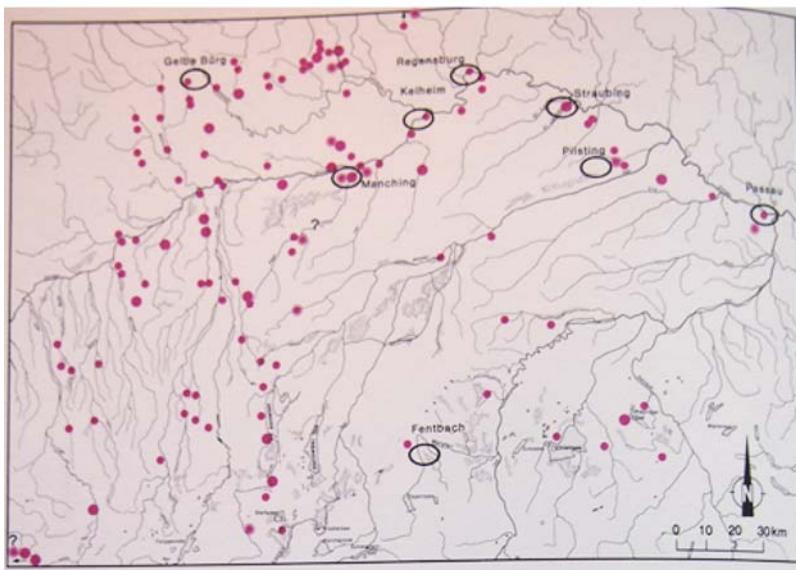


図3 バイエルン南部の銀貨・青銅貨（図上）と金貨（図下）の出土地
 [楕円はオピドゥムの所在を示す] (*Ibid.*, S.19-20.)

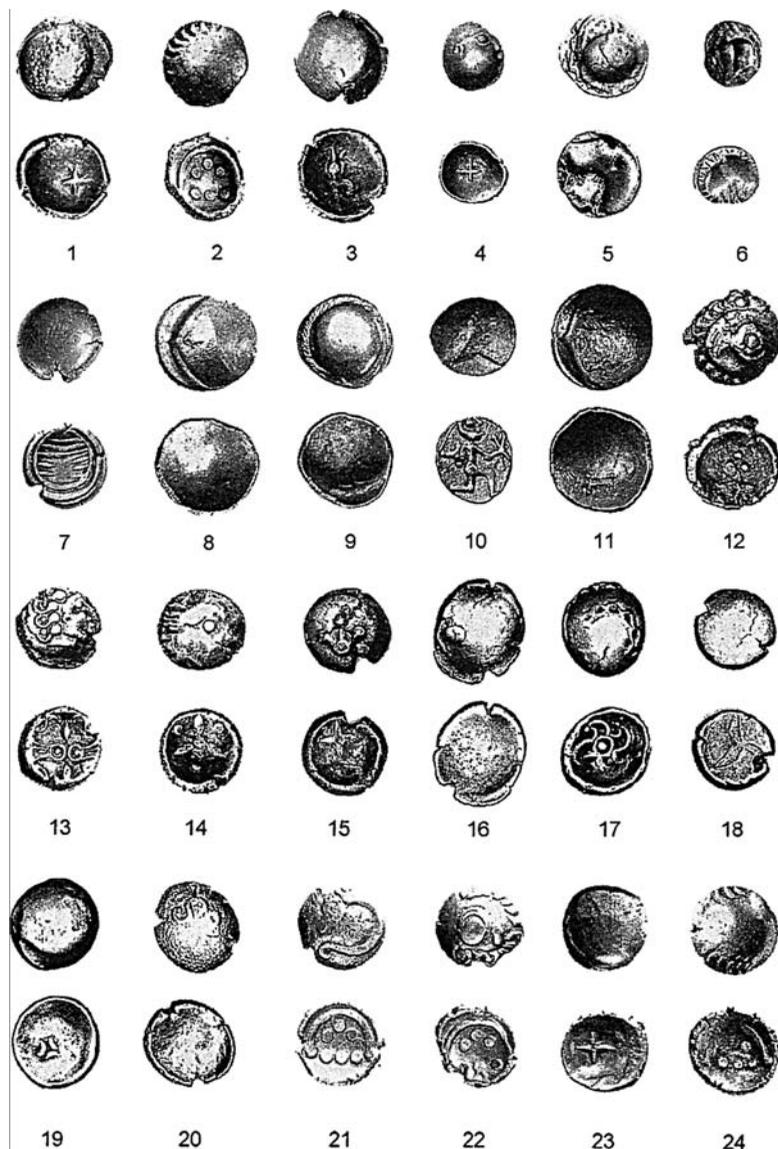


図4 バイエルンの「埋蔵貨」の貨幣

[1~7, 24: グロースピッセンドルフ 8~11: ヴァラーズドルフ 12~15: アマー湖
16~20: ゾントハイム 21~22: イルシング 23: ガッガース]

(Bernward Ziegeus, "New aspects on Celtic coin hoards in southern Germany," in G. Morteani and J. P. Northover (eds.), *Prehistoric Gold in Europe*, Kluwer Academic Publishers, Netherlands, 1995, pp.597-608, p.601, fig.1.)

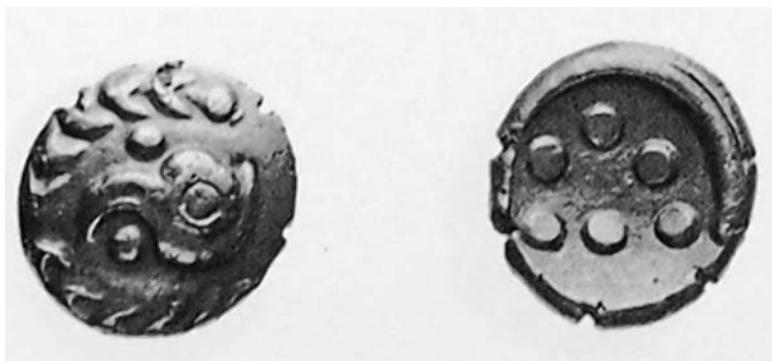


図5 イルシングの鳥の頭の図像（左）の貨幣

[Inv. Nr.1461 Stater AV, Gew. 7,460 g]

(Kellner, *Die Münzfunde von Manching und die keltischen Fundmünzen aus Südbayern*, Taf.45 より抜粋。)

お わ り に

現段階の考察と分析では、ケルト貨幣の機能と「埋蔵貨」の意味を明らかにすることは困難である。そのことを念頭に置きつつ、本稿での議論のまとめと筆者の考えを最後に述べておきたい。

ケルト世界の貨幣は紀元前2世紀以降、社会が「都市」としての発展のなかで盛んに製造された。それらは交易に用いられるなど、「商業のための道具」という貨幣本来の役割を、一定程度は果たしていたと考えられる。

そのようななかで、「埋蔵貨」は未使用の、とくに価値の高いスタテル金貨を中心とした多量の貨幣によって構成され、水辺や辺境の地中など、特定の環境を選んで埋納された。すでに述べているようにその役割は不透明なままであるが、筆者は以下の理由から、これらが「宗教的な奉納物」としての側面を強く持っていたと考える。

アルプス山脈の北のケルト人居住域に点在する「埋蔵貨」は聖域のほか、地中や水中など、古くよりケルトの神々が宿ると考えられた場所に、農民の小規模な儀式の形態である「埋納」というかたちで遺される。「埋蔵貨」のある場所は簡単な「聖域」として機能し、人々によって自発的に崇められる場所であったのではないだろうか。ケルト貨幣の「埋蔵貨」の存在は、ケルト社会が「都市」へと変化していくなかで残っていた自然の神への信仰心が、「貨幣」という、新しくもたらされた要素を用いることで続けられていたことを示すものではないだろうか。貨幣に刻まれた図像には、その共同体と結びつく神性と推測できるモチーフを持つものもある。それらは、ケルトの人々が自分たちの宗教観を表現し、確認するための場所として、貨幣を用いていたと考えることを可能にする。貨幣が「商業のための道具」だけでなく、「信仰のための道具」であった可能性をも見出すこともできるのである。

むろん、検討事例が鮮少であるゆえに、これらの議論は現段階では推測の域を出ない。貨幣に吹き込まれた役割と「埋蔵貨」の真意を明るみにするために

は、個々の「埋蔵貨」のコンテキストや、出土貨幣ひとつひとつの細かな分析を行なうことが必要である。本稿に挙げた事例のさらなる分析と新たな事例の確認を通して、貨幣の機能と社会や宗教との連関の解明につとめたい。

註

- (1) 松平千秋訳、『歴史（上）』、岩波書店、1971、1977年、78-79頁。
- (2) Hans-Gert Bachmann et. al., "New aspects of Celtic gold coinage production in Europe," in *Gold Bulletin*, 32(1), 1999, pp.24-29, p.24.
- (3) Hoards に正確に対応する訳語はなく、「退蔵貨」や「一括出土銭」と呼ばれることもある。アンドリュウ・バーネット（小山修三監修、新井佑造訳）、『コインの考古学（大英博物館双書⑥）』、学藝書林、1998年では Hoards は「貯蔵庫」とも訳される。
- (4) Daphne Nash Briggs, "Coinage," in Miranda J. Green (ed.), *The Celtic world*, Routledge, London, 1995, pp.244-253, p.247.
- (5) Hans-Jörg Kellner, "Coinage," in Venceslas Kruta, et. al. (eds.), *The Celts*, Milan, 1991 (rep. New York, 1999), pp.475-484, p.475.
- (6) John Collis, "The first towns," in Miranda J. Green (ed.), *op.cit.*, pp.159-175; Peter S. Wells, "Settlements and social systems at the end of the Iron Age," in Bettina Arnold, and D. Blair Gibson, *Celtic chieftdom, Celtic state: The evolution of complex social systems in prehistoric Europe*, Cambridge University Press, Cambridge, 1995, pp.88-95.
- (7) Bernward Ziegaus, „Keltische Münzwerkzeuge aus dem Nörtlinger Ries Ein Vorbericht,“ in *Abhandlungen der Braunschweigischen wissenschaftlichen Gesellschaft*, Bd.60, 2008, S.113-127, S.115-116.
- (8) 南ドイツ地域で見つかる表面がへこんだ貨幣のこと。「財宝が虹の端で見つかる」という中世の迷信に由来する名前。
- (9) Hans-Jörg Kellner, *Die Münzfunde von Manching und die keltischen Fundmünzen aus Südbayern* (Die Ausgrabungen in Manching Band 12), Steiner Franz Verlag, 1998, S.9-11.
- (10) Rupert Gebhard, "The "Celtic" oppidum of Manching and its exchange system," in *Different Iron Ages: Studies on the Iron Age in Temperate Europe*, Tempus Reparatum, Oxford, 1995, pp.111-120, p.113.
- (11) Colin Haselgrove, "Iron Age coin-finds from religious sites and contexts in N Gaul," in, Ralph Häussler, Anthony C. King (eds.), *Continuity and innovation in religion in the Roman West: 2* (Journal of Roman Archaeology, Sup-

- plementary Series ; 67, 2), Society for the Promotion of Roman Studies, Portsmouth, 2008, pp.7-23, p.9.
- (12) Bernward Ziegaus, "New aspects on Celtic coin hoards in southern Germany," in G. Morteani and J. P. Northover (eds.), *Prehistoric Gold in Europe*, Kluwer Academic Publishers, Netherlands, 1995, pp.597-608, pp.605-606. pp.599-600.
- (13) Kellner, *Die Münzfunde von Manching und die keltischen Fundmünzen aus Südbayern*, S.37.
- (14) Haselgrove, op.cit., p.9.
- (15) Ibid., p.11.
- (16) Jean-Louis Brunaux (trans. Daphne Nash), *The Celtic Gauls: Gods, rites and sanctuaries*, Seaby, London, pp.13-21.
- (17) Haselgrove, op.cit., p.16.
- (18) Derek F. Allen, "Celtic coins from the Romano-British temple at Harlow, Essex," in *The British Numismatic Journal*, 33, 1964, pp.1-6.
- (19) Ziegaus, "New aspects on Celtic coin hoards in southern Germany," pp.605-606.
- (20) Haselgrove, op.cit., p.12.
- (21) Ziegaus, "New aspects on Celtic coin hoards in southern Germany," p.605 ; Rudolf Pörtner, *Bevor die Römer Kamen*, Weidbild Verlag, Augsburg, 1995, S.386-387.
- (22) Kellner, *Die Münzfunde von Manching und die keltischen Fundmünzen aus Südbayern* S.35-37.
- (23) 飯尾都人訳, 『ギリシア・ローマ世界地誌』, 龍溪書舎, 1994年, 321-322頁。
- (24) 「・・・このようにして積み上げられた戦利品の山は, 多くの部族が神聖な場所とみなしている。滅多にないことだが, 宗教をないがしろにして, 戦利品を手元に隠したり, 積み上げたものを持っていくような大胆な振る舞いをした者には厳罰が下され, 拷問にかけられることになっている。」
石垣憲一訳, 『ガリア戦記』, 平凡社, 2010年, 222頁より抜粋。
- (25) Kellner, "Coinage", p.475-476.
- (26) Brunaux, op.cit., pp.89-90.
- (27) Jürgen Zeidler, "Cults of the 'Celts': A new approach to the interpretation of the religion of Iron Age cultures," in Raimund Karl, Jutta Leskovar (Hrsg.), *Interpretierte Eisenzeiten. Fallstellen, Methoden, Theorie*, Fdge.18, 2005, pp.171-179, pp.174-175.
- (28) 埋葬を自然信仰の儀式と結びつける所以は, 農業の神はすなわち土の中の神であ

- り、土の中の神はすなわち冥界の神であると考えられたためである。紀元前5世紀まで一般的であった土葬も、死者を地中に埋葬することは、農作物や家畜を埋めるのと同じように、土地の肥沃を祈願することにつながったと考えられている。Brunaux, *op.cit.*, pp.89-90.
- また、紀元前8世紀～紀元前6世紀の埋葬の神聖性については Bettina Arnold, "A Landscape of Ancestors: The Space and Place of Death in Iron Age West-Central Europe," in *Archeological Papers of the American Anthropological Association*, Volume 11, Issue 1, January 2002, pp.129-143. を参照。
- (29) Gebhard Dobesch, "Ancient Literary Sources," in Venceslas Kruta et. al., *op.cit.*, pp.30-38.
- (30) アンドリュウ・バーネット (小山修三監修, 新井佑造訳), 『コインの考古学』, 45-49 頁。
- (31) Rudolf Reiser, *Die Kelten in Bayern und Österreich*, Rosenheimer Verlagshaus, Rosenheim, 1984, S.22.
- (32) *Ibid.*, S.81-83.
- (33) タラニスは「主権」や「天空」など、エスは「富」や「あの世における生」などをそれぞれ司る神性。紀元後1世紀のローマ人作家マルクス・アンナエウス・ルカヌスの『内乱記』には、これらの3柱は皆、恐ろしい犠牲を求める無慈悲な神として描かれている(第1巻444-446)。紀元前5世紀以降これらの神々はケルト美術に表現され、「イノシシ(テウタテス)」「馬(タラニス)」「ヤドリギの葉を携えた横顔(エス)」など様々なモチーフを持つ。Jean-Jacques Hatt, „Die keltische Götterwelt und ihre bildliche Darstellung in vorrömischer Zeit“ in Ludwig Pauli, Louis Bonnamour et. al., *Die Kelten in Mitteleuropa: Kultur, Kunst, Wirtschaft: Salzburger Landesausstellung 1. Mai-30. Sept. 1980 im Keltenmuseum Hallein Österreich*, Amt der Salzburger Landesregierung, Kulturabteilung, Salzburg, 1980, S.52-67.
- (34) Ziegau, "New aspects on Celtic coin hoards in southern Germany," pp.600-603.
- (35) 疋田隆康, 「古代ガリア社会におけるケルトの伝統-ガロ=ローマ文化の形成」, 『史林』, 86巻4号, 2003年, 535-566頁, 543頁; 鶴岡真弓, 『ケルト/装飾的思考』, 筑摩書房, 1989, 1993年, 131-134頁。
- (36) 鶴岡真弓, 「反 ^{アンソロポモルフィズム}人像主義 -ケルト美術の枠組-」, 『史潮』, 37, 1995年, 2-18頁, 11-12頁。